

発表タイトル	東ニカラグア、ミスキート諸島海域のアオウミガメ漁船
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	高木 仁

1. はじめに

博論の課題は、熱帯サンゴ礁海域でアオウミガメを獲る人々の暮らしを例に「先住民による希少な自然資源の利用」について議論することである。これまでの研究でミスキート諸島海域での現代のアオウミガメ漁が過去の銛突き漁 (Nietschmann 1973) から網漁へとかわっていることがわかってきたが (高木 2012)、漁船についてくわしいことはよくわからない。発表では建材、船体設計と造船についての成果を報告し、課題を考察する。

2. 結果

1) 建材

船の建材は自治州の各地から集められた。それぞれ図 1 の a. 竜骨は内陸の低山地帯のとある村、b. 竜骨 (前) は村はずれにある森、c. 肋骨と d. 外板は「砂の港」というすこしはなれた海辺の村 (大湿地林帯) から取り寄せたものであった。水路で運ばれた建材 (20 数 kg 以上ある肋骨木や 50 数本の外板) は、船主の息子や娘婿、借りのある知人、荷運び、小遣い稼ぎの子らが肩にかついで運んだ。

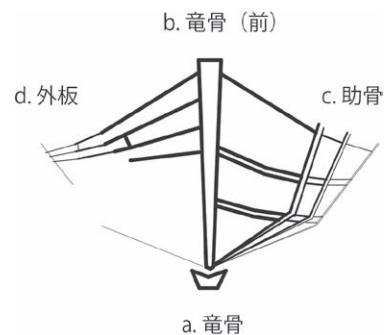


図 1. 漁船 (正面)

2) 船体設計, 造船

村の船大工らは、現代のアオウミガメ漁船の船体設計が 60 年代にかけて同海域で操業していた英国領ケイマン諸島の船を模倣したものだという。はじめて原型がつくられたのはケイマン諸島の操業が禁止になったところで、今ではさらにおおきく改良されているという。滞在中、村のある舟大工の造船作業を 2 か月ほど手伝ったのだが、複雑な工具は電動のこぎりくらいで、身近にある鉄筋を曲げて肋骨をかたどり、大きな金属ねじを尖らせてノミとしてつかうなどの工夫がみられた。

3. 考察

東ニカラグア自治州の地形は若干の起伏に富むだけにみえるが、おそらく各地で物産やそれに準じた物流網があり、比較的数のある建材を組む現行の船はそうしたものに下支えされているのだろう。また、海辺の村落の人々はおなじところで操業していた英国領ケイマンの帆船の船体設計を模倣・改良しているが、複雑な工具をもちいない造船は特筆して興味ぶかい。こうした造船努力にも現代のアオウミガメ漁は支えられているのだろう。

高木仁 2012. カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲—ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例『ピオストーリー』18, 93-99. Nietschmann, B. 1973. *Between land and water: The Subsistence Ecology of the Miskito Indians, Eastern Nicaragua*. New York: Seminar Press.